
妖狐玉藻伝-羅刹の絶狐丸-

御劔剣次

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖狐玉藻伝 - 羅刹の絶狐丸 -

【Nコード】

N1015F

【作者名】

御劔剣次

【あらすじ】

生まれたことを祝福されず、人々から疎外された少女。十六歳のある日、とうとう死を決意する。その少女の前に、妖狐の玉藻絶狐丸が姿を現し、妖術を持って少女を人から脱却させた。そして、少女の妖怪としての新たな人生が始まる。これは、宮座頭数騎さんとの共同制作です。彼の玉藻伝ともリンクしています。

第一話 幸無き少女（前書き）

御劔初めての強姦表現が含まれます。R18ではないですよ。

第一話 幸無き少女

「なんで生まれて来たのよ!」「あんたなんか生まれなきゃよかったのよ!」「あんたさえいなきゃ私は!」「なんで私だけこんな目に! あんたのせいよ!」

こう言われ続けて、育ってきた。

「あの人の娘さんだつて」「まあ可哀相に」「あんな所に生まれて可哀相に」「毎日暴力を振るわれてるみたいよ。可哀相に」「可哀相に」「可哀相」「可哀相」「可哀相」

そう哀れみの言葉の中で、歩んでいた。

「あいつ、暗くて気持ち悪い」「知ってるか? あいつ、なにされても黙ってるんだつてさ」「マジで? じゃ、イジメちゃう?」「

“イジメ”はよくないですよー? ……ぷっ! はははは!」「はははは! じゃ、決まりい!」

そうして私は、イジメに合いながら学校に通った。

こんな私を、助けてくれる人なんかいなかった。みんな、見てみぬふり。助けを求めることも、小学校で辞めた。大人はみな口先だけで「もう大丈夫」だの「助けになる」だの言うだけで、実際はなんにもなっていない。

ただ、耐えて生きてきた。なるべく避けて生きてきた。小学五年生のころには、とうとう母親に見捨てられ、家にいても食事を与えてはもらえず、よく近所のコンビニの残飯を譲ってもらった。惨めな目で見られるのは嫌だったが、生きるためには仕方ないと割り切った。

中学に上がりたかったが、母親はとうとう学費すら払ってくれなかった。捨てられていた辞書などを拾ってきて、自分で学んだ。二ページ毎くらいに一度、塩辛い水滴の跡を付けてしまう。

十四歳。なぜ母親が私を家に置いているのかわかった。私に保険

がかけられていた。いつか、殺されるかもしれない。そうビクビクしながら、落書きの多いボロボロの教科書に目をやり、辞書を引き、人差し指ほどもない鉛筆を、チラシの裏に滑らせる。

十六歳。アルバイトをしようと思い、応募するが、“あの家の娘”だと言ったことでも探ってはくれない。やはり、コンビニの残飯をもらう。顔馴染みになった店員さんは色々優しくしてくれたが、視線は私の体を舐め回す。気は許さなかった。

ある暗い夜。残飯をもらい公園で食べていると、五人の高校生に囲まれた。

「こいつ、あの家の子だ」「マジか。なら、やっちゃっても問題ねえな」「へっへ、じゃ、今月はこいつだな」

腕を掴まれた。抵抗したけど、無駄だった。そのまま、引きずるように人気の無い所へ、そして……。

気が付いたら、高校生はいなくなっていた。三月はまだ寒い。身体中が痛い、ベタつく、くさい。涙が止まらない。とにかく身体を洗いたくて、人目につかない林の中の川に、体を引きずるように向かった。

地獄のような毎日に、唯一、私の心を慰めることがあった。それは、十三歳の時のこと。公園で過ごしている時だった。

いつものベンチに座って、残飯を食べていた時のこと。狐が五メートルほど先に表れた。私は何気なくその狐を見ていた。もう日が沈みきり、明かりと言えば公園にある、足元をぼんやり明るくする程度の街灯しかない。そんな中でみた狐は、少々痩せすぎている気がした。

なんとなく、パンに挟まっていたソーセージを投げてよこした。狐は警戒し、ゆっくりとそれに近寄り、匂いを嗅いでから口にくわえ、走り去った。私はなんだか、それが幸せだった。こんな私でも役に立てた、という実感が湧いた。

それから、週に一、二度程、狐に会うようになった。なかなか心は開いてもらえなかったが、それでもよかった。

暴行を受けた日。体を洗い、ボロボロにされた衣服の代わりに、やけにきれいな捨てられた毛布を体に巻き付け、公園のベンチに座った。すると、狐がいつものように表れた。

「ごめんなさい。私、今、あなたにあげられるものはないの」

残飯がないことが、悔やまれた。高校生に引きずられた時、一緒に取られてしまった。残ったものには、あれを掛けられていて、とても食べられなかった。

怖かった。食べ物をもらえないと思って、狐が私のところに来てくれなくなるんじゃないかと。必要とされなくなるのが怖かった。

視界がゆっくり歪んでいき、頬に、熱いものが伝った。これは、暴行を受けた悲しみじゃない。これは、必要とされなくなる恐怖だ。存在理由が保険金のためだけになってしまう恐怖だ。

狐に必死で、見捨てないでほしいと目で訴えた。その願いが通じたのか知らないが、夜が明けて私が家に帰るまで、狐は私の前に居てくれた。

「ありがとう……」

帰り際、私は狐に笑顔で感謝した。狐はじい、とこちらを見た後、いつもの方角へ走り去っていった。

帰宅した私は、母親がいないので、寝ることにした。母親がいる間は、怖くて眠ることなんてできなかった。今日一日は、男の家に行っているはずなので、ゆっくり眠れる。

私は家の敷地内の、日の当たらない、人目につかないところに積み上げた段ボールハウスの中に入り込み、そこに敷いた固い布団の上に、今日拾った柔らかい毛布に包まれて、泥のように眠った。眠れたのは、本気に久しぶりだった。

しばらくして、いつものように残飯をもって公園に向かうと、騒

がしい声が聞こえた。私は怖くなって、その日は、静かになるまで離れた位置にある公衆トイレに隠れた。

何時間も騒いでいた声が無くなり、人の声がなくなった頃、私はトイレから出て公園に入った。

何か、異様な匂いがした。嗅いだことのあるこの匂いは、血の匂いだ。背中に冷たいものを感じた。すぐに騒がしかった所へ向かうと、なにかが公園の真ん中に置いてあった。

薄暗くて何か解らない。自分にそう言い聞かせたが、真っ暗なトイレにずっと籠もっていたので、薄ら明るい街灯の明かりでも、何なのかは十分鮮明に見えた。

私の中に最初に走った亀裂は、衝撃。次の亀裂は悲しみ。次の亀裂は絶望。そこからヒビが広がって、数十秒後、粉々に砕け散った。粉碎した心は体を支え切れず、膝が地面に落ちた。そして、目を地面に向けた。

狐だ。あれは狐だった。無惨にも、引き裂かれ、臓物をすべて引きずりだされ細切れにされ、四肢を切断され首を断たれた、狐だった。あの子が、なにをしたと言うのだろうか。なぜ、こんな酷い姿にならなければいけなかったのだろうか。

「おっと、戻ってきてみたら、前のあいつがいるじゃん」「あ、本当だ。あいつ、締めまりいいからさ、またマワそうぜ!」「いいなそれ! こいつならやり放題だしな」

あいつらだった。前に私を……。

「どうして…… どうしてこんな酷い事を!」

私は感情に身を任せ、高校生に掴み掛かった。驚いた様子が、次第に怒りに変わるのが解った。次の瞬間、強い衝撃と共に、地面に飛ばされていた。

「うぜえよ! …… 教えてやんよ。こいつ、なんか知らねえけどいきなり飛び付いてきやがったんだ。だから、ム力ついたからぶっ殺したんだよ!」

サッカーボールのように、あいつは狐の頭を蹴り上げた。頭はゴ

口ゴロと転がり、数メートル離れた所で止まった。

「酷い……」

そう呟いた途端、前と同じように引きずられた。しかし、私はもう、抵抗する気が無かった。ただ、狐のことが悔しかった。悲しかった。……怖かった。

布切れとなった衣服は、もう使えないと思い、身体に付けられたものを拭き取るのに使った。また、あの川に向かった。

川に浸かると、途端に涙が溢れた。汚されたのはどうでもよかった。ただ、悲しかった。狐を殺されたことが悲しかった。そして、怖かった。

これでまた、必要とされることのない、生ゴミのような自分に戻ってしまった。それが怖かった。怖くて怖くて、涙が止まらない。いつか、悲しみさえも掻き消して、恐怖が私を支配した。

服は、ゴミ捨て場から合いそうなのを適当に着た。家には帰らなかった。帰りたくなかった。その日一日、公園のベンチに座り尽くした。私を哀れみ、疎む声が風に乗ってやってくる。近付いてきた子供は、母親や近所のおばさんの怒鳴り声で、私のそばまで来ることはなかった。それもそのはずで、私の目線の先には、不完全に隠された血の跡がまだ残っている。死体は、市役所が業者に依頼して片付けたんだろう。

その血の跡を、日が地平線に落ちるまで、眺め続けていた。今の私は、なにも考えなくなかった。もはや、すべてがどうでもよくなってきた。

日が沈み、街灯が照らし始めた頃、私は帰宅した。母一人子一人で住むには少々大きい一軒家。今日も母親はいない。私は居間に置かれたテーブルに向かい、拾ったチラシの裏に、辞書を引きながら字を書いた。

この時、生まれて初めて「遺書」という字を書いた。内容には、ただ母親に向けて「生んでくれてありがとう」とだけ書いて、丁寧

に折り畳んで置いておいた。そして、すっかり暗くなった町の中、公園に向かっていった。

どうやって死ぬかまでは考えていなかった。道路に飛び出せば、撥ねた人に迷惑がかかる。線路に飛び込めば、電車の人に迷惑がかかる。飛び降りるなら、その建物の所有者に迷惑がかかる。

結局、私は生きてても死んでいても、他人に迷惑しかかけられない。そう思うと、余計に生きていてはならない気がした。狐だつて、私が餌を与えなければ公園に来ることはなく、あの高校生達に殺されることもなかっただろう。

色々悩んだ末、ナイフが何かで首の動脈を切ることにした。手首だと、躊躇ってしまいうまくいかないらしい。なら、首ならどうかと思ったから、首になった。

そう決めても、私の足は公園に向かう。最後に、狐のために祈りたかった。自分のせいで死んでしまったようなもので、せめて、狐の魂が救われるよう、祈りたかった。昔拾ったマンガの受け売りだ。

公園に着いてみると、異様に静かだった。確かに、林に隣接したこの公園は、町の騒音を林が吸収して静かな所となっている。しかし、今のこの静かさは、異様な雰囲気醸し出している。

公園に踏み込むと、いつもはあの高校生達がたむろっているベンチ付近に、一つ人影がある。

そうか、今日はいづらがいないから静かなのか。自分の中でそう納得しようとしたが、どうもこの雰囲気はそれだけでは済まなさそうだった。少し怖かったが、その人影に近付いてみた。どうせ捨てる命なので、怖がるうが私には関係ない。

ベンチの陰になっていた人影の足元が、見えるようになった。すると、驚くべきものが転がっていた。街灯の明かりに照らされるそれは、見覚えのあるような帽子やジャケットを着けていた。あの高校生達だ。しかし、様子が変だ。身動き一つしない。まるで死んでいるかのように。

そこに立つ人影に視線を戻すと、目が合った。途端に、全身が強ばり、呼吸が止まり、人影から目を離せなくなってしまった。蛇に睨まれた蛙、ということわざを思い出してしまった。

怖い。正直にそう思った。腰を下ろしそうになったが、体が言うことを聞かず、膝を震わせながら立ち尽くしていた。不意に、その人影がこちらに向き直り、歩み寄ってきた。一步近づく度に私の緊張が高まっていく。

人影の輪郭がはっきりとしてきた。彼は端整で中性的な顔立ちをした少年だった。ただ、その黄金色に輝く瞳は、私を射殺すかのように冷たく視線を送る。銀色の髪が、目の前で揺れている。気が付くと、彼はもう、目の前まで来ていた。

意識が朦朧とし始め、思い出した。今私は呼吸をしていなかった。苦しいが、思うように呼吸できない。体のすべてを、目の前の少年に支配されているようだった。私はこのまま死ぬのだろうか、頭の片隅で意識した。

しかし、不意に少年の瞳から冷たさが消えたように感じた後、体が急に動き始めた。膝が崩れ、地面に落ちる。必死に酸素を取り込むために肩で息をする。酸欠で目の前が霞んでいた。その間もやはり、生きていたいとは思えなかった。酸素を取り込むのも、体が勝手に行っているだけだ。

呼吸が整うと、私は顔を上げた。はるか頭上にある少年の顔と再び向き合う。

「君は、どんな死に方がいい？」

偶然であるだろうけど、私の迷いを少年は言った。私はこの時に、彼が普通じゃない、もしくは人間ではないことを直感した。何故か人じゃないと思えた。少年は、後ろに転がる高校生達のほうに、少しだけ顔を向けた。

「あいつらは結構うるさく吠えてたから、静かにしてあげたんだよ。喉が無くなれば吠えられないからね」

そう言い放つ少年の顔は、まるで汚い生き物を見下すかのようだ

った。その顔が再び私を捉える。その瞬間、景色が一変した。

背景は白。目の前に立つのは少年。残酷な笑みを顔に張り付けている。そして、拳を腰で構えたかと思った次の瞬間には、私のお腹に腕が突き刺さった。私の背中からはお腹の中身が、口からは見たことないくらいの量の血が吹き出した。

死んだ。これでやっと……。しかし、次の瞬間にはまた少年が目の前に。こんどは見たことのない黒色の炎を少年が放ち、私の体が一瞬で燃え上がる。タバコを押しつけられたときよりも熱く、それが全身を覆った。

また死んだと思った次には、また少年が目の前に立っている。こんどは頭をゆっくり締め付けられ、潰れた。次は心臓を引き出され、次は容赦なく叩き潰され……。

そんな死のイメージがずっと続いた。その間、私は常に自分を遠く感じていた。また死んだ、また死んだ、と、自分のことを冷たく考えていた。

ふと気が付くと、私は少年を見上げていた。どうやら終わったようだ。

「さあ、どんな死に方がいい？ とは言っても、もう選ぶ余裕なんかないかい？ 人間は弱いから……？」

少年は不思議そうに私を見下ろしてくる。多分私が、予想していた行動を取らなかつたからだだろう。あんなものを見れば、気が狂ったりするのだろうか、今の私は、ただ静かに少年の顔を見ているだけだ。

しばし沈黙が流れる。私が、その沈黙に耐えかねて口を開こうとしたその時、少年は突如振り返った。

「見つけた……玉藻絶狐丸！」

声がして、私もそちらに目を向けると、みたことのない妙な服を着こんだ男女が何人かいた。そして、誰も彼もが武器を所持しており、殺気立っている。

「蓮花^{れんか}一族の……仇っ！」

叫んだ大男が槍のようなものを構えながら、こちらに走ってくる。危ない、と少年に叫ぼうとした瞬間、少年は私の目の前から消えた。次の瞬間には、大男が死体になって地面に叩きつけられていた。

「うるさい奴らだな……」

そう呟くと、少年は腕を前に突き出し、手の平を空に向けた。すると、その手の平に黒い炎が現れ、次第に大きく、丸くなっていた。バスケットボールくらいの大きさになったとき、少年はそれを空に放り投げた。

「雑魚は、消えなよ。炎槍雨^{えんそうりゅう}」

少年が手の平を握り締めて拳を作ると、その上空で風船が割れるような音がした。次には風を切る音。

近くに、何かが落ちた。びっくりしてそつちをみると、私のメートルほどのところに黒い何かが地面に刺さっていた。刺さっている所からは、煙が立ち上がっている。

その黒いものに気をとられていると、短い悲鳴のようなものが聞こえてきた。再びあの男女のほうに目を向けると、あの人達がいるあたりに集中的にそれが降り注いでいた。私の近くにも何本か落ちてくる。私は、それに当たればいいと思いながら、一部始終を見守った。

黒いものが降ったのは少しの間だけだった。それがやむと、立っていたのは少年を含めたったの四人だけだった。ほかの人達はみなどこかに消えている。もしかしたら、焼き尽くされたのかもしれない。あの黒いものは、少年の出した黒い炎だと思うから。

「これが、あの天狐の力なの？」

立っていた女性がそう口にするると、少年の雰囲気が変わったように見えた。何か、怒っているかのように見えた。

「これだから人間は、くだらない生き物なんだ」

少年はそれだけ呟くと、また消えた。いや、物凄い早さで三人に向かって行った。三人のうち二人は、同じくらいの早さで動いた。それが見えた途端、二人はそれぞれ二つずつに分かれて吹き飛んで

いた。

「くっ！」

女性が手にした刀を振り下ろした。が、少年は片手でそれを止めて見せた。

「馬鹿な!？」

そう驚いた女性の首を片手で掴み、持ち上げた。

「くだらないんだよ、おまえら……僕の前から消えなよ。アッハハハハハ！」

刀を片手で押さえ、もう片方の手で女性を軽々と持ち上げながら、少年は笑っていた。

笑いを短く途切ると、少年は小さく「羅刹日【凶】（らせつじつきょう）」と言った。すると、女性の首を掴む手から突然爆発が起き、一瞬で女性を黒が包み込んだ。絶叫が聞こえるその黒い塊を、少年は地面に放り出した。そして、私の方へと再び歩み寄ってくる。「さて、邪魔者はいなくなっただね。これから、君をどう殺そうか？」少年はそう言い終わると、足を止めた。そして、遠くを眺めるように別の方向を見て目を細めた。

「……ケーサツ、か。これ以上うるさくすると、後々面倒になるかな。仕方がない」

少年は一人呟くと、踵を返した。そのまま、立ち去ろうとしているのだろう。

「ま、待って！」

思わず、呼び止めてしまった。すると、少年は振り返ってくれた。「命拾いしたね。精々、また僕に会わないように気を付けるんだよ。死にたくなきゃね」

そう言い残すと、少年は高々と飛び上がって消えた。私が再び口にした「待って！」は、林の中に吸収されていった。

しばらく呆然としていると、パトカーのサイレンが聞こえてきた。我に返った私は、その場から逃げるように帰宅を急いだ。

警察というのは、好きじゃなかった。なにかあれば私みたいなつ

まみものにやたらと疑いを寄せてくる。コンビニから残飯をもらえば、万引きかときいてくる。捨ててあるものを拾えばやれひったくりだの、盗んだだの、と。

私は、家の敷地内の段ボールに潜り込んだ。母親が家に返ってくるのは明後日になるので、遺書は置いておいても平気だろう。それに、私の命も明日で終わりだ。

明日は、少年を探してみようと思う。見つければ、あの不思議な力で殺してくれると思う。見つからなくても、私は自分の手で死ぬ。私の寿命は、明日なのだ。

だから、今日はゆっくり眠ることにした。明日のことを考えると、怖くなると思ったが、そうでもなかった。たぶんこれが、死を覚悟する、ということなのかもしれない。

第一話 幸無き少女（後書き）

文章がへぼいのは御劔の技量不足。内容がつまらなかったら、御劔の構成力不足です。酷評待ってます。

第二話 出会い変わる（前書き）

長いことお待ちしました！。書けないのです、御劔は。

第二話 出会い変わる

朝から、昨日の少年を探すために、町を彷徨い歩いた。特にあてはない。見つけられる自信もない。けれども、探したかった。見つけたかった。殺してほしかった。もう一度、会いたかった。

道を歩けば、通りかかる主婦や老人が、私に聞こえるか聞こえないかの距離でひそひそとなにかを話している。聞かなくてもわかるあの家の子だ、とか、学校にも行かせないで、とか、そんな内容だ。聞き飽きている。

ふらふらと、屋根の上や植えられた木の上、半都会化している町にしては珍しく多い自然などを見て歩いた。なんとなくそういう場所にいるような気がしたから。

「おい、その君！ 学校じゃないのか？」

後ろから声をかけられ、振り返ると警官がいた。私の顔を見ると不良への怒りの顔から、まるでゴミでもみるかのような表情に変えた。あまりに露骨ではあるけど、いつものことだ。

「あゝ、君か……」

それだけ呟くと、自転車をまた漕ぎだした。もう、慣れてる。何も感じない。去る警官を見送った。

日がとうとう、真上からずいぶん下がってきた。もしかしたら、見つからないのかもしれない。そう思うと寂しくなってきた。最後にもう一度だけ、会いたかった。歩き疲れた私の足は、知らず知らずのうちに公園に向かっていた。

日が沈みきり、茜色の空が少しずつ深い青色に変わっていく。私はそれを、いつものベンチに座って見上げている。この景色も、今日で最後か。そう思うと、いつも見ているはずの景色が、やけに新鮮に感じられた。うつすらと光を放つ街灯。風に揺られて葉の擦れる音が響く林。ほとんど人の座らないベンチ。花の植えられた花壇。

私は、こんなに素晴らしい場所にいつもいたのか。

それらに見入っていると、いつのまにか辺りは闇に包まれていた。照らすのは、街灯と月だけ。私は深いため息を吐き、立ち上がった。ポケットに忍ばせてある、裏路地に捨てられていたナイフを手で触って確認した。今朝、家を出る前に一生懸命石で研いたので、私の首を切る分にはなんの問題もない切れ味のはずだ。

私は今一度、自分の覚悟を固めるために、その柄を強く握り締めた。そして、あの林の中へと、ふらふらと向かっていった。

町の中にある林なので、外からは丸見えになるが、公園の真ん中で死体が見つかるよりはいいと思い、ここに入った。別に、公園じやなくてもよかった。しかし、私は、狐が死んだこの公園を、自分の死に場所にしたかったのだ。ただの我儘、だ。

いよいよ、ポケットからナイフを取り出す。その手が震えている。知らずのうちに、やはり恐怖が私を覆っている。震える右手を、震える左手が支え、その手に握るナイフの刃を、私の首筋に

「誰かと思えば、昨日の人間か。ここで何をしてるんだい？」

聞き覚えのある声が聞こえた。急いで振り返ると、そこには、今一番会いたかった人物がいた。それも、結構近くにだ。いつのまにそこに来たのか、まったくわからなかった。草木を踏みしめる音すらしなかったはずだ。

私は今にも泣きだしそうになりながら、少年のほうに振り返る。

「そんな貧弱な刀で、僕と戦おうって言うのかい？　僕もなめられたものだね」

少年はさも可笑しいといった様子で嘲笑う。私ははっとして、右手に持ったナイフに気が付いた。慌てて投げ捨て、首を左右に振って否定した。声に出して言おうと思ったが、うれしさや恐怖や悲しさなどの色々な感情によって、喉が凍り付いたみたいに音を発せなかった。

「それじゃあ、ここでそんな物を持って、何をしようとしてたんだい？」

そう言う少年の目は、冷たく鋭く私を刺し貫いていた。おそらく、返答次第では殺す、と言いたいのだろう。

ここで嘘を言って殺されるのもいいと思ってはみたが、私は彼に嘘をつきたくなかった。

「……自殺、です」

そう言った瞬間、少年の表情は冷たいものから、見下すようなものに変わった。

「へえ、自殺。自分で自分を殺すって言うのかい？ 本当に人間はくだらない生き物だね。自分から命を捨てようなんて。……難なら、僕が殺してあげようか？」

この時、この少年は冗談のつもりでそう言い放った。“殺す”という表現が出れば、ひるんだり、やはり嫌だ等と弱音を吐いたりするだろうと思ったからだった

「……お願い、します……」

彼の手にかかれるなら、本望だと、そう思ったから、私はそう返した。しかし、彼の表情は、私がこう返すことがまったくの予想外だったかのように、啞然とした顔をしてみせた。

「……本当に死にたいって、わけか」

少年はそれだけ呟くと、目を細めて私を見た。そして、昨日のように不意に歩み寄ってくる。

「よければ聞かせてもらえるかい？ 君がどうして死にたいのか」

少年は私の目の前まで来て、そう言った。何故？ と、声にできない分、彼の瞳に目で訴えた。

「僕は君に興味が湧いたよ。殺すのはその後に、ね」

少年はさも面白そうにそう言った。私は、少年に興味を持たれたことがうれしかった。今まで、「興味がある」なんて、一度も言われたことがなかったからだ。これだけのことで、私は、今まで生きててよかったと、本当に思えた。

しかし、私の身の上話は本当につまらないものでしかない。話して聞かせたところで、笑ってもらえるようなものでも、聞いて得し

たと言えるようなものでもない。私の話がどうか、彼の興味を満たすものでありますようにと、祈りながら口を開いた。

私が「生まれなければよかった」と言われ続けて育ったこと。

私が「可哀相だ」と言われ続けて生きてきたこと。

私が「あいつ、根暗で気持ち悪い」といじめられながら学校に通っていたこと。

私が、母親に食事すら与えられなくなったこと。

私が、中学校に生かしてもらえなかったこと。

私が、狐に餌をあげて、それ以来何回が出会って、うれしかったこと。

私が、少年に殺された高校生に汚されたこと。

私が、狐が殺されてとても悲しくて、怖かったこと。

そして、少年に出会えて、不思議と会いたくなったこと。

それらすべてを、彼に話して聞かせた。私の人生なんて、紙一枚で済ませられると思っていたのに、意外と長くなってしまった。途中で立っているのがつらくなって、彼に申し訳なく思いながら木の根元に腰掛けさせてもらった。

「……それで、君は憎くないのかい？」

長い話を聞き終えた彼が、そう尋ねてきた。あまりにも意外で、私は顔を上げて彼の顔を見た。

「憎い？　なにがですか？」

そう聞き返すと、彼はまた意外そうな表情をした。私はそれを見て、わからないと目に込めて訴えた。

「そんなふうになされてさ、憎くないのかい？　人間が」

憎い。私はそれを考えてみた。私を捨てているも同然の母親。思い起こしても、憎いと思わなかった。悲しみと恐怖だけが、私の心に影を落とす。他の人も同様に思い起こしてみても、感じるのは悲しみや恐怖だけ。憎いと思ったことは、一度もなかった。

「思い、ません」

そう言うのと、彼は一度も見せたことのない表情を、私に見せた。それは、いつも母親が私を見るときに作る表情に似ていた。つまりは、怒り。

「どうしてなんだい？　だって、非道い扱いを受けてきたんだろう？　ゴミみたいに捨てられて、虫けらみたいに暴力を受けて。いつか……害虫みたいに殺されてたかもしれないんだろ？」

声を荒げるようなことはしなかったが、彼は私の肩をしつかりと掴み、私になにかを言い聞かせるかのように一言一言、重みを持たせて放った。私にはそれが、過去に身近に起きたことで、それを思い返しているように見えた。

しかし、なんと言われても、私には憎しみの心は生まれなかった。憎いと思えないのだ、すべてのものが。狐を殺された時でさえ、高校生が憎いとは思えなかった。ただ、狐が死んだことが悲しかっただけだ。

「それでも私は、誰も憎いなんて思えません」
本心からそう言うのと、彼の表情がまた変わった。今度は、悲しみを帯びた表情だった。

彼の中では、この少女の顔の上に、別の少女の顔が重なって見えた。見掛けも、顔の造形も、髪の色も、声も、種族も、話すことも……とにかく、なにかもが違うというのに、少年には記憶の中の少女と目の前の少女が同じに見えた。それは、“魂”が、似通っていると言うことなのだろうか

「何故、何故君は憎いと思わないんだい？」

彼は哀れむ表情で、そう尋ねてきた。哀れみの表情をされたのは、私にはショックだった。悲しまれるのは好きじゃない。いや、嫌いだ。みんな口先だけで可哀相可哀相って言うだけで、誰も救いの手を差し伸べてくれるわけじゃないし、私の手をつかんでくれるわけじゃない。

泣きそうになった。表情を誤魔化すのは得意だけれども、感情までは誤魔化せない。自然と涙が出た。

「そんな顔、しないで……イヤ……」

声は擦れたが、ちゃんと届いていた。彼は気が付くと、一度下を向いて、感情を押し殺した表情を作った。こっちのほうは何倍もよかった。

「……何故、君は憎いと思わないんだい？」

私が落ち着いたところを見計らって、彼が再び尋ねてきた。私は、その問に対する答えは持っていない。しかし、その代わりになりそうな思いなら、昔から心に秘めている。それがなぜか、彼への答えになるような気がした。

「……すべての人間が、そうじゃないから。たまたま、私の周りの人間が酷い人だけで、世の中には、いい人がたくさんいると思うから、です」

それは、言ってしまうえば私の願望。我儘。こんな私を受け入れてくれる人が。必要としてくれる人が。友達と、仲間と呼んでくれる人が。そんな人達が、この世界のどこかに必ずいるという、私の妄想。そんな人が居るはずが無いと言い聞かせ、しかし、諦めきれなかった希望。のぞみ

彼は鼻で笑うだろうと、柄にもなく予想してみた。その予想は、まんまと外れた。

「なんで、そんなふうに言い切れるんだよ……」

彼は、納得できないと言った様子で、急に私の目を覗き込んだ。

「なら、賭けをしないかい？」

「……賭け？」

彼の言ったことが、理解できなかった。

「これから先、僕が君にあらゆるものを見せてあげるよ。それを見てもまだ、何も憎いと思わないんだったら、ご褒美をあげる。それだけの話だよ。簡単でしょ？」

彼は、意地悪そうな笑みを浮かべている。しかし、突然すぎて私は理解しきれしていない。やっと理解したところに、彼に尋ねてみた。

「それじゃあ、もし私が、何かが憎いと思ったときは、なにがある

んですか？」

「そうだなあ……手足を引き千切って、無理矢理寿命まで生きててもらおうかな。死ぬまで絶望を味わいながら、さ」

聞いててぞっとするようなことを、まるで友達との軽い口約束であるかのように言い放った。乗るわけがない。断ろうと思ったときふと、もう一つ気になる点を聞いてみた。

「その、どうやって見せるんですか？ 昨日みたいに、不思議な力を使うんですか？」

すると、彼は軽く首を振った。

「いや。君を、僕の手下にするのさ。そうして、人間たちとの戦いに力を貸してもらおうと思ってるね」

え？ それって、つまり……。

「わ、私……私の力を、借りるんですか？」

私がそう聞き返すと、彼はしめたとばかりに目を細めた。

「そうさ。今まで必要とされなかった君に、僕が居場所と生きる理由をあげるよ。僕のために戦うかい？ それも、何も憎まずに、ね」

その言葉を理解した時、私の頬を温かいものが流れ落ちた。この涙は、前に一度だけ感じたことがある。この感覚、そう、あの狐に、餌をあげなくてもそばにいてもらった時に流した涙と一緒にだ。

私は嬉しさで流れた涙を拭おうともせず、彼の言葉に頷いた。何度も、何度も。

「そう。じゃ、君の名前を教えてもらえるかな？ 手下にするには必要だからね」

それを聞いた瞬間、私の胸が強い力で締め付けられた。

私の名前。それは、イジメられた要因の一つでもあった。母親が邪魔な子である私につけた、とても非道い名前。とても人の名前とは言えないようなもの。

言うのにためらっていると、彼の冷たい視線が私を刺す。しばらく黙っていたが、いよいよ耐えられなくなってしまった。私の人生を笑われるのはいい。だけれど、名前で笑われるのはどうしても嫌

だ。

「……あの……笑わないで、くれますか？」

「ん？ ああ、笑わないよ」

釘は刺したけれども、やはり、心配だ。笑われたときは、そうだ、彼を怒らせよう。そして、殺されてしまおう。そう心に決め、口を開いた。

「……こ……くさ、こ……」

それだけ言うのが必死だった。いざ言うとなると、また喉が凍り付いた。

「漢字は？」

彼は意に返した様子もなく、そう聞いてきた。私は笑われなかったことで、少し救われた気がした。

「……雑草に、子で……くさこ……」

少しだけ勇気を奮って、少しだけ大きな声で言った。といつても、ささやく程度の大きさでしかなかったが。

「ふうん。雑草子って書いて、くさこ、か……」

それだけ言うと、彼は懷から何かの器を取り出して蓋を開いた。

そして、中の真つ赤な液体を人差し指に付着させた。

「動かないでね」

そう言つて、私の前髪を避けて額にその液体を付けた。なにかを描いているようだったが、よくわからなかった。

「服、脱いでもらえる？」

そう言われて一瞬、あの高校生達にされたことを思い出して、体が強ばった。恐怖が顔に浮かんでしまった。

「僕は人間の身体なんかに興味はないよ」

彼は心外だと言わんばかりに不機嫌そうに言った。それで私も、その心配はないとわかり、恐る恐る服を脱ぎさった。

彼は胸元にも赤い液体を付着させていく。やはりなにかを描いているようだが、よくわからない模様、とだけしかわからなかった。それからヘソまで真つ直ぐ線を引いて、お腹にもまた違った模様を

描いていく。それがくすぐったかったが、唇を噛み締めて我慢した。
「よし、と。確かこうだったな」

どうやら模様描きは終わったようで、指先を私の脱いだ服で拭いていた。

「さて、仕上げに入るかな？ ああ、成功するかどうかまでは、僕にはわからないから」

わざと私を不安にさせるようなことを言う。失敗したらどうなるか聞こうか迷ったが、聞いたなら怖くなりそうだったので聞かずに黙った。それを見た彼は、嘲笑うように小さく笑った。

やがて、彼は真面目な表情をした。いよいよ始まるのか。私も彼の雰囲気当てられ、緊張した。私の額に向かって、彼は手の平をかざした。

「我、玉藻絶狐丸が書す」

額が熱くなってきた。どうやら赤い液体が熱を帯びてきているようだ。

「人たる汝の道程に、我ら人ならざる者の性を」

額が火傷しそうなほどに熱くなっている。叫んでこすりたい気持ちを、歯を噛み締めて押さえこんだ。目に涙が滲んで彼の顔が見えない。額が焼ける。燃えているように熱い。

目の前を、何かが降りていったような気がした。すると、額の熱さが嘘のように無くなっていった。代わりに、胸元の辺りが熱くなり始めた。

「人たる道程を外れ、我らに帰化せよ。道を外れよ、邪を脱せよ」

胸元が熱い。焼け溶けてしまいそうだ。このまま焼け死ぬのではないかと思えてくる。熱くて、痛くて、涙が次々に溢れて落ちていく。声は、出さなかった。氣力を振り絞って、耐えた。

そして、額と同じように熱さが引いていくと、彼が引いた胸元とお腹を結ぶ線が、熱を帯びていく。上から下へ、その線を熱が通って行くようだ。風に吹かれて冷えた液体が、燃え上がるように熱くなっていく。

次はお腹、か。私は齒を食い縛って、次に来るであろうお腹への熱を覚悟した。

「そして我を主と崇め、讃え、従え。汝は我が僕なり。汝は我が僕なり」

お腹が、特にヘソが熱くなっていく。ヘソの周りも熱いのだが、それが気にならなくらいにヘソが熱い。焼けたタバコを腕に押しつけられたこともあつたが、あんなものは虫に留まられた程度にしか思えないほどの熱さが私を襲う。

感じたことのない熱さだが、たとえるならば、燃える油を、いや、溶けた鉄をヘソに流し込まれているようだった。泣き叫びたくなり、暴れだしそうになった身体をなにかが押さえ付けてくる。動けない分、喉が裂けんばかりに叫んだ。

死ぬかと思う暇もない。思考は真っ白で、激痛色のペンキを常に縦横無尽に塗りたくられているようだった。とにかく叫んだ。彼はこの間も呪文のようなものを唱えているのだろうが、今は何も聞こえない。自分の叫び声すらも。もしかしたら聞こえているかもしれないが、脳が痛み以外の感覚を拒絶しているのだろう。

最後に、本能的に、さつき聞いた彼の名前を叫んでから、私の意識のヒューズが飛んだ

彼は、術を掛け終えた途端に崩れ落ちた彼女の体を、優しく抱き留めた。途中から声帯が裂けて擦れ声しか出さなかった彼女が、最後に自分の名前を叫んだのを、聞き逃しはしなかった。

面白い玩具を手に入れた。心ではそうほくそ笑んでみても、実際の自分は彼女を優しく抱いている。彼は自分自身がわからなくなっていた。なぜ、人間“であつた”彼女が、こんなにいいとおしく思えるのか。

……彼女に被って見えたからか？ 心で呟いてみてから、まさかと打ち消した。彼女を殺した人間に、彼女を見いだすなんてこと、あるはずがない。そう自分に言い聞かせた。

「さて、そろそろ行こうかな？ 人間達がくる前に」

遠くに聞こえたサイレン。付近の住民が、ただならぬ女性の悲鳴を聞いて、すぐさま110番したのだろう。面倒事を嫌う彼は、少女を抱き上げて、夜の闇へと消えていった

第二話 出会い変わる（後書き）

読み直したら落ち込みました。なんてへボい文章だよ、と……。しかし、上手く書く術を知らない御剣には、上手く書くなど夢のまた夢、と……。 「作者クソだ」等の評価は、作者へのメッセージでお願いします。評価欄には書かないで〜！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1015f/>

妖狐玉藻伝-羅刹の絶狐丸-

2010年10月10日00時38分発行